

## ヨーロッパの航空機産業に関するノート

5

1976年 世界の航空機産業は大きな期待をもって、それまでの2年間の不況とインフレーションから抜け出した。1960年代の初めに設計され世に出された世代の航空機は、急速に寿命に近づきつつあった。業界筋では、民間用航空機の売上高だけでも、その市場規模が1985年までに1975年価格ベースで500億ドル位になるであろうと予測していた。この市場のシェアを確保するためには、メーカーはここ1年半の間に設計と資金調達に関する重大な判断を迫られていた。

10

航空機産業はヨーロッパ共同体に又とない機会を与えた。EEC委員会は1975年末に閣僚会議に対し報告書を提出し、加盟国の政府及びメーカーが密接に協力し合い、将来の民間用及び軍用航空機の市場における大きなシェアの獲得に取り組むべきことを提言した。1976年にはグループ・オブ・セブンと呼ばれるヨーロッパの主要メーカー〔エアロスパシアル社、ダッソー・ブレグ社(フランス)、BAC社、ホーカー・シドレー社(イギリス)、メッサーシュミット・ビュルク・ブローム社、ドルニエール社(ドイツ)、VFWフォッカー社(ドイツ=オランダ)〕の代表達が幾度となく会合をもち、共通の戦略を練る試みが続けられていた。

15

しかし、1976年8月にフランスの運輸大臣マルセル・カベーユはメルキュールの新型機200の製造及び販売をフランスのダッソー社とエアロスパシアル社及びアメリカのマクドネル・ダグラス社のジョイントベンチャーで行うことについて、原則的合意を得たと発表した。上記7大メーカー群の他のメンバーたちは、初め不満の意を表明はしたが結局その計画に参加することに関心を示した。1977年初頭当時、こうしたヨーロッパ企業による共同体に米国を参加させるか否かの選択とプロジェクトの骨子を明確にすべき時期がせまっていた。リスクと投資額も大きいが成功すれば利益も大きかった。

20

25

---

このノートはJose de la Torre準教授の指導の下にMs. Dana DyasとMr. Greg Thompsonの2人の助手が公表された資料をもとにまとめたものである。このノートの作成にあたっては、第15回INSEAD Promotion(1973-74)から助成金を得ている。

このノートの版権は、1977年、ヨーロッパ経営大学院(INSEAD, Fontainbleau, France)によって取得されている。慶應義塾大学ビジネス・スクールは、これを、教育目的に使用するために邦訳した。

30

[1983年6月, T. YH(K. ON)]